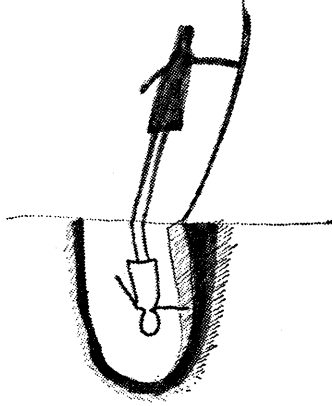


今日より明日へ



## 赤羽美代子

Tは先天的に、心臓に幾つかの障害をもった男児である。Tの全身は、つきたてのお餅のようで、白くプアーッと脹らみ、肌はポテリと弛み、生気がない。顔面蒼白、口唇は紫色。2・3歩、歩むと、すぐ蹲しゃがまる。ことばにならない、力の入らない声を発する。

そのTは、3歳の誕生日を迎えた時、無事に心臓の手術を完了した。

数ヵ月後に、Tが3歳児で入園してきた。比較的血色はよく、蹲まる事もなく、目元も確かである。ただ、Tのことばを解する事は、Tの家族さえ難解を極める。困

った事にTが、自分の話が相手に通じない事を感じている。相手がTに聞き返すと、ションと頭を下げて、むっつりとだまり、締めてしまう。

Tは、朝早く元気に登園して来る「オットアッター」日本語では書けない発音で語り出す。このTの第一声に、教師は緊張する。すばやくTの目線、指先を追い、Tが何を見、何を指さし、何を語りたいかを、全身で理解する努力をしなければならぬ。Tが元気に登園した最初の時間に「受け入れられていない自分」と理解して、自らの心を閉ざす事のないように注意する。

教師は、まず心の中でTのことを繰り返す「靴下を指さしていたし？ 目は前方を見ていたし？ 昨日遊んだ、スクーターの事かな？」……「Tちゃん、車庫へ急がないとお友だちが乗ってしまいうわよ」教師は「君のことばは、確かに理解した」と、云う意味を込めて、どうしようと云ってみる。T「うん。オットアッター」と、力強く云い、運動神経未発達の足元で、ドタンスタンと馳けて行く。

遊び仲間の3歳児は、Tの難解なことを解し、Tとよく遊ぶ。お食事の時、Tの周囲には各年齢層、入り交って着席している。Tが5歳児の肩を叩き「デデトウテイトウ」と云う。5歳児は御飯を口に含んだまま、じっとTの顔を見つめる。すると隣席の3歳児が「先生にチョコレート、と云ったんだよ」

5歳児「先生にチョコレート上げるの？」

T「うん。ムミームトウテイトウ」

3歳児「クリームチョコレートだつてさ」

5歳児「いちご組（3歳児）の子って凄いなー。Tちゃんの話が解っちゃうんだね。どうしてかなー」と首を傾げ、顔を紅潮させて感激している。

以上の事例のような状態が、二学期の終了を迎えるまで、続いた。T自身、周囲の者が驚く程、発音がはっきりしてきた。それに、大分おしゃべりとなり、T語で容赦なく語る。殊に、年長組がTのことを理解しようと努力する姿は、真に、ほほえましい。

幼児自身は、その自覚が薄いとしても、それぞれに小

小さな重荷を背負い、小さな生の旅路を織りなしている。まず、旅の始まりに、この、いと小さき者の集団が、彼らの憩いの場となり、重荷を下ろして、身も心も解放される家となればと、理解し、その憩う場として園は提供されていると考えている。憩いの家の教師は「神様との責任関係」を果す者であり「今日より明日へ」一歩一歩、成長する幼児の発達の手伝いをする為、この場にある者である。しかし「愛の責任をもって行なう」働き人でありたいと願いつつも、未熟な我われには、或る時には、真に苛酷な舞台である。「仕えられる者でなく、仕える者」として用いられている私たちに、神様が託された、ひとりひとりの、大切な幼児である。

幸い、R園の教師は、この考え方を、共に選択し、選びとり、保育の土台に据えて、幼児と教師の関係を整え、保育学を学び合い、努力をしている積りであるが……。

園児の背後に、互いに認め、励まし、高め合う、力強い教師集団がなければ、障害児を交えた幼児の群は、い

と貧しき集団となりましょう。Tが、今日より明日へと確かな足跡を残せるよう、教師も、明日に向かって行く者でありたいと願ひ続けております。

(霊南坂幼稚園)

### 「最終回」

いつも仲好しで遊んでいるS子とY子、このところ毎日白雪姫ごっこにこっている。朝からひとしきりやっている間に、女の子たちが何人か一緒に入ってやっていったが、やがて三々五々違うあそびに移っていった。やはりはじめた二人は今日も朝からずつとなので、よくまあ、くりかえし続くことと思っていると、とうとうS子が言った。

「ねえ、Y子ちゃん、白雪姫ごっこはもう最終回にしましょうよ。」Y子はそれに答えて言った。「いいわよ、じゃあこれで最終回よ。また明日の朝しましょうね。」

(K)